

平成 24 年 12 月 3 日

国土交通省関東地方整備局
事業評価監視委員会
委員長 家田 仁 様

横浜環状道路（圏央道）対策連絡協議会
会長 比留間 哲生

貴委員会への住民の意見申し入れについて

前略

先に行われました 10 月 22 日及び 11 月 26 日の事業評価監視委員会における首都圏中央連絡自動車道（金沢～戸塚）案件（以下、横環南線）という）について、委員会資料並びに委員会での審議につき、住民として種々の看過できない多くの内容が見受けられます。別紙のとおりモニター傍聴に参加した住民から数多くの意見が寄せられていますのでここに早急に申し入れます。

私達は先日配布された資料を地質学専門の先生方に評価をしていただいているところでこの度の中央高速道の事故が発生しました。この原因については予断は許しませんがトンネル事故の重大さに住民の関心は増すばかりです。先日来、要望している地質学者を至急招聘すべきであると再度要請いたします。

貴委員会におきましては、道路事業における特有な問題が横たわる、すなわち、「国策の名の基に沿線住民の健康等生活環境面の大きな負担と忍従を虐げられる」という構造上の問題を回避すべく十分なる審議をお願いする次第です。

横環南線沿線地域のほとんどは既に形成された「住」専用地域であり良好な生活環境を維持した地域であり、国策の名のもとにこの状態を大きく悪化させる権利は何人にもありません。

貴委員会の良識ある審議をお願いする次第です。

草々

（別紙）

事業評価監視委員会（横環南線）に対する住民意見及び要望書

(別紙)

事業評価監視委員会（横環南線）に対する住民意見及び要望書

平成 24 年 12 月 5 日

1. 小泉委員の意見について

地盤工学の専門家である小泉委員は、一般国道 468 号（南線）沿線の地盤はさほど悪くなく、盛土も 40 年以上経過して固まっているのでトンネル掘削による被害は殆んど考えられない旨の意見を述べた。これは神奈川県や横浜市による環境影響評価の見解と大きく異なるものであり、以下にそのことを指摘する。

神奈川県の環境影響評価書には「計画路線は、軟弱地盤と想定される地域をトンネル、掘削、高架および盛土構造等で通過するため、周辺の住居等に地盤沈下の影響を与えることが考えられる」とし、具体的に「公田インター地区、笠間地区は軟弱地盤地域における掘削工事による地下水脈の遮断、地下水位の低下」、「田谷地区は軟弱地盤地域における掘削工事による地下水位の低下および盛土による圧密」、「庄戸、湘南桂台、朝日平和台地区は山岳トンネル掘削に伴う地盤の緩み」などの恐れを指摘している。

また、環境庁長官から建設大臣に対して次のような意見書が提出されている（平成 7 年 4 月）。「本計画道路の一部地域には非常に緩い地盤が分布しているので、地盤沈下防止のため、開削工事、トンネル工事等の施工においては、…適切な処置を行う必要があること」。

なお、地震についても小泉委員はさほど心配いらぬかのように述べたが、横浜市環境影響評価審議会の意見には「神奈川県のアボイドマップには、笠間町の一部地域で地震時における液状化の可能性が指摘されているので事業の際には詳細な土質調査を実施し、必要に応じて地震時の安定性に配慮すること」とある。

以上、環境庁（現環境省）、神奈川県、横浜市の環境影響評価の意見は、いずれも南線沿線は軟弱地盤地帯で地盤沈下の恐れがあり、また地震時に液状化の可能性があると指摘されており、このことは法的にはもちろん、関係住民の生命、財産を守るためにも事業評価監視委員会の再評価に必ず取り入れられるべきものとする。

2. 小泉先生の発言に対する反論

小泉先生のお話の中で疑問に思った点がいくつかありました。その中で最も大事な点二つに絞って反論させていただきます。

一つは、「地盤（岩盤）が固くてしっかりしている。」という点です。

もうすでにご存知の通り庄戸地域、桂台地域には野島層と呼ばれる堆積岩、

朝日平和台付近には大船層と呼ばれる堆積岩が分布しております。これらの地層は第三期末期の堆積岩で、堆積岩の中では最も新しい部類に属します。

堆積物は時が経つに従って続成作用を受け、次第にかたい岩石になっていきます。野島層は続成作用を受ける時間が短いためまだ十分には固まっていないのです。NEXCO から出された資料によりますと土粒子の密度は約 $2.7\text{g}/\text{cm}^3$ 、また別の資料（資料 1）によりますと凝灰質砂岩の湿潤密度は約 $2.0\text{g}/\text{cm}^3$ になっております。この差は凝灰質砂岩が隙間だらけだということを示しております。続成作用はその隙間に SiO_2 や CaCO_3 などが入りこみ、これらが粒子間の接着剤、充填剤の役をして密度・固結度ともに増していくのですが本地域の凝灰質砂岩はそれが十分ではないのです。その証拠に切り土して埋めた物質に占める礫の割合は約 30 数%です。残りの 60 数%は元の砂、火山灰、粘土に戻ってしまったのです（資料 2）。また、ボーリングの柱状図（資料 3）でも細片化、軟質化、土砂状等の文字が目につきます。

湘南桂台においては考えられないことですが礫が 0 になっております。

構造物を作る側からしますと、十分に堅硬な岩質で崩壊・地盤沈下等の起こる確率は極めて低いとお考えからの発言でしょうが、その住民からすると工事中の振動、供用後の大型車の通行による振動等によって盛り土部だけでなく岩盤部にも沈下が起こると信じております。

*資料 1、資料 2、資料 3 はいずれも 平成 19 年度 横浜環状南線 庄戸地区土質調査報告書 東日本高速道路株式会社 株式会社復建技術コンサルタントによる

二つ目は、庄戸の地盤は盛土がなされてから 40 年くらいたっているので締め固められて丈夫になっているといわれたことです。

「斜面防災都市」をお書きになった釜井俊孝先生はその本の中で「仙台市近郊の丘陵地を構成する軟岩（新第三系の泥岩、砂岩、凝灰岩）は、スレーキング（乾湿繰り返しによる分解、細粒化、粘土化）しやすい物質であり、こうした材料で構築された盛土は、造成後通常とは逆に強度を低下させる場合がある。宮城県沖地震における谷埋め盛土の被災率が、年代が古くなるにつれて顕著に大きくなる傾向は、こうした盛土材料の性質を反映している可能性がある」と述べておられる通り、時間の経過に伴って地盤が締め固められていくとは限らないのです、「年代が古くなるにつれて顕著に大きくなる」とも書かれている通り弱くなっている可能性が十分にあるのです。

また盛土地盤がしっかりしているので液状化は起きないでしょうとおっしゃいました。インターネットで検索してみますと N 値が 10 以下だと起きやすいという記事がたくさんありました。庄戸の盛土の N 値は NEXCO のボーリング資料によりますと盛土のいちばん深い No.2'（資料 2）においては地表から

9.10mまでの上位盛土での N 値は 7~23、9.10mから 22.85mまでの下位盛土では 5~11 と下位盛土では 10 以下が大半を占めております。

さらに、東京工業大学名誉教授の吉見吉昭先生の記事（資料 4）によりますと「N 値が 23 を超えるあたりから液状化抵抗は急に増す・・・」とされています。23 以下だと危ないということです。これを当てはめると No.2'の盛土の一番上から一番下まで全部、もう少し広げますと庄戸の盛土地域のほとんどが液状化の危険があるということになります。

トンネルが出来ることによって液状化・地すべりが起こることはないでしょうが、大地震が起きた時に工事による振動、大型車の通行による振動・トンネルの存在が液状化・地すべりに全く影響を与えないと言い切れるのでしょうか。住民は必ず影響があると信じています。

3. 評価委員会に関して

現在の評価委員会は、道路建設の障害排除の評価委員会になってしまっている。本来の評価委員会の目的に立ち戻るべきである。

評価委員会で議論すべきは、その道路を造る必要性和、住民の蒙る被害を含めた道路建設の障害との比較評価である。

現在、国交省ならびにNEXCOから聞かされるのは、道路が出来ると、こんなに便利になるという、有効性の話ばかりであって、必要性に関する具体的説明は一度も無い。

まず、道路を計画の場所に建設し無ければならない必要性についてつまびらかにし、それを住民に判るように説明した上で、障害との比較評価を行うべきである。

4. 専門委員の追加について

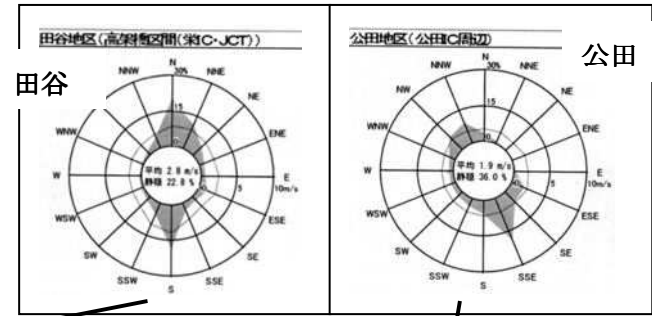
現在の事業評価監視委員会委員の中に、「大気汚染予測」、「地盤沈下」、「騒音・振動」、「居住環境と路線問題」、「費用対便益」に関する専門家は居られないと考えます。

専門家不在の委員会で、「事業者は住民の理解を得るように努力せよ」というよりは、委員自ら住民の主張と事業者側の主張のどちらが正しいのかを審議し判断すべきものと考えます。

従って、「大気汚染予測」や「費用対便益」に関する委員を加える必要があると考えます。

5. 大気予測に係わる事項（再評価資料4-3-②）

“風向・風速の気象調査”において「谷部に位置する地域が特有な気象状況とは考えられない」と述べられているが、気象状況は特有とは言えないとしても、問題は主に地形に起因する。平地である田谷の風向分布（北が卓越風）は当地域の代表的風向分布と考えられる。これに対し、公田の風向分布は、北西～北北西や南南東の風向が多く、気流（風向）が地形の影響を受けている事を強く示唆する。従って、一様な気象条件を前提とするプルームモデルによる予測結果は局地的高濃度を予測出来ない。更に凹凸地形による上下方向の気流の影響も大きな問題である。



地形図は国土地理院“ウオッチーズ”より。風配図は、再評価資料4-3-②より